

Eureka VII

六年制通信 No.10 令和2年7月10日(金)号

いちいちきつ 一挨拶

挨拶・清掃・時間厳守。この三つが Educated Action の基本だと、私は考えています。ですから皆さんにはしっかりできるようになってもらいたいと思います。きれいな空間は私たちの心に大きな影響を与えます。割れ窓理論を持ち出すまでもなく、汚れた空間を私たちは本能的に嫌悪しますから、生活空間を美しく保つのは当然です。ただし、誰かがきれいにしてくれると思わずに自分で、そしてみんなで協力して掃除をすることが大切です。また、時間厳守はたびたびこの通信でも取り上げています。時間を守れない人間は信用できません。そして、これは清掃と違って、誰かが代わりにしてくれるということがありません。私の時間を君が守ってくれるということは不可能です。つまり、ごまかしが利かないということですね。

そして挨拶は基本中の基本。「おはようございます」、「こんにちは」、「ありがとうございます」、「すみません」、「さようなら」、他にもたくさんあるでしょうが、これらは単によく言われる社会生活のコミュニケーション手段や日常の潤滑油であるだけではないと考えます。挨拶はその人の人格、人としての成熟度、生きる姿勢、やさしさ、強さ、そういった全てを表現していると思います。ですから適当にしていけません。相手にちゃんと伝わるようにはっきりと声に出しましょう。私たちには握手やハグの習慣がありません。その分挨拶は（できれば笑顔つきの）一層大切だと言えます。少し意味をおさらいしておきましょうか。

「おはようございます」は「今日もお早いですね」という意味。農耕民族の名残ですよね。「朝は朝星戴いて、夜は夜星を戴いて」という表現がありますが、農耕民族の朝は早いのです。「こんにちは」は「今日のご機嫌いかがですか」でしょうね。最初の部分だけが残ったのでした。「ありがとうございます」は「それは実に有り難いことです」、文字通り「有り難い」のであって、当たり前のことと思っておけません、感謝申し上げます、という意味。「すみません」の「すむ」は納得する、満足するという意味で、「こんな、お礼を言うくらいではまだまだ私の気持ちは十分に表現できていないのですが…」というのが本来の意味です。「さようなら」は「左様ならば、お別れしましょう」から来ています。「左様ならば」は「そうであるならば」ですから、別れ際に「じゃ、そういうことで」と言っているのは語源的には正しいですね。「そういうことで」がどういうことなのかは知りませんが。別れの挨拶は英語では See you again.、ドイツ語で Auf Wiedersehen.(アウ ヴィーダーゼーエン)、中国語で再見

と言って、「また会いましょう」が多いようです。「じゃ、そういうことで」式の挨拶は他にあるのかなあ。

もともと挨拶という言葉は、仏教用語です。「挨」は押す、「拶」は迫る。仏教の禅宗には問答によって、つまり会話によって仏法修行の核心に迫るという発想があるようです。それを「一挨一拶」と言います。ここから挨拶という語が生まれたわけですが、もともとは激しい真剣な言葉のやり取りを指していたのですね。

今の私たちは、修行と思って挨拶をするわけではありませんが、せめて心を込めて挨拶したいものです。私は、本音を言えば、挨拶は自分のためだと思っています。心にどんな悩みがあっても、嫌なことを抱えていても笑顔で挨拶をすることで、笑顔で普段通りの挨拶ができることで、私はそれらに打ち勝つことができている、そう思えるからです。挨拶を忘れるようでは、それこそ修行が足らんわけですね。

ちなみに「挨拶する」は英語で greet と言います。君たちも a greeting card を知っているでしょう。語源辞典によれば、借入語ではなくて生粋の英語でした。もちろん「挨拶する」という意味なのですが、シェイクスピアの『リア王』に「迎える」の意味で出ているとのことなので、調べてみました。見つけましたよ。物語の終盤、第5幕の第1場 54 行目。We will greet the time. (直訳：その時を迎えるぞ) とありました。昔から権威のある訳では「間に合うようにします」、新訳では「よし、ただちに戦いのぞもう」でした。注釈なしにシェイクスピアが読めないのわかるでしょ。

今週のおすすめ

・エドガー・アラン・ポー 『赤き死の仮面』 (新潮文庫)

これはポーの短編集 I 『黒猫・アッシャー家の崩壊』の中にある、ほんの 11 ページの短編です。巽孝之という人の翻訳です。私は外国文学の翻訳をめったに誉めないのですが、この訳はいいと思います。ミステリーを読み込んだ上で訳しているのがよくわかります。もし江戸川乱歩の『人間椅子』がこの翻訳に紛れ込んでいたとして、知らずに読んだら、ポーの作品だと勘違いしてしまうのではないかと思います。巽さんは乱歩の作品を熟読しているはずです。

さて、この短編は黒死病（ペスト）がベースになっているのですが、「赤死の仮面」ではなくて「赤き死の仮面」と訳したわけは本書の解説に述べられています。

赤死病という恐ろしい病に襲われた国の王プロスペローは、まだ元気な者たちを城壁の中に集めます。そこで怪しげな七つの部屋を舞台に仮面舞踏会を開くのですが、赤死病そっくりのコスチュームを着た誰だかわからない人が現れます。プロスペローは逆上し、その男を短剣で刺すのですが…。コロナ禍の中で読むと怖い話です。

ちなみにプロスペローという名は、シェイクスピアの『テンペスト』の主人公で元ミラノの王。たまたま同名なのか、ポーが拝借したのかはわかりません。『テンペスト』も不思議な物語ですから、これはこれで読んでごらんください。

ポーの短編集三冊と『人間椅子』の入った乱歩を一冊、図書館に入れておきます。

BGMは 杏里 の SUMMER CANDLES でした…。